



時間

レー・トゥアン・ウエン

ケンブリッジ大学出版局の辞書では、時間を「分、日、年などではかることができる存在の一部、もしくはひとつにまとってみなされるその経過」と定義している。時間とはまた、計測するための単位であり、進展や変化を表す。過ぎ去ったら二度と取り戻すことができないため、時間は貴重なものだ。時間は、過去を離れて未来に突き刺さる矢のようでもある。私たちとともに動く普遍的な事物であるにもかかわらず、それが社会的構成概念でもあることはしばしば忘れられてしまう。社会によって作られ、意味づけられているがゆえ、時間をどう理解するかはさまざまだ。ユダヤ教やキリスト教では、時間は線的にとらえられている。つまり、生命の始まり（天地創造）とその終わり（最後の審判の日）がある。一方、東方の霊的信仰では、時間はもっと円的なものであり、始まりは終わりでもある。このふたつの考え方は、時間に対する態度を異にしていく。前者は時間は限りあるもの、だから足りないと考える。かたや後者は、時間は螺旋を描き続けるものととらえている。人類の発展の形式がそれぞれ異なるため、それ以上に優れた、あるいは生産的な時間理解はない。きわめて流動的で、厳密に言えば、何かに動かされているこの社会は、個人の活動に対してひとつの枠組みや規範を当てはめようとしてしまうため、私たちは、どのような時間の扱い方に対しても等しく敬意を払うことを忘れがちである。